

# 世界の中の日本古典文学—翻訳と研究方法の問題点から

アンドンソヴァ・マラル

日本の古典文学を国際的な視野において研究するに際して、どのような問題が生じるのだろうか。一つ目の課題として考えられるのは翻訳の問題であろう。日本語の文体に特有の敬語表現や主体未分化表現などは、他言語へとどのように伝達されるのかということについて考えてみたい。本稿では、古典文学の代表的な作品である『古事記』および『源氏物語』を取り上げ、それらの英語及びロシア語への翻訳事例を確認しながら考察する。

もう一つの重要な課題は、研究方法の問題である。海外において古典文学が享受されるとき、その文化圏において蓄積されてきた研究史および概念と結びつける形で享受される。この視点からみると、日本古典文学研究に対してどのような課題を提示できるのか、ロシア語圏の研究の側から考察する。

## I. 原典の翻訳・伝達における課題—敬語表現

日本の古典文学のテキストの一つの特徴は文章の主語が明確化されていない点である。『古事記』及び『源氏物語』の英語・ロシア語への翻訳事例を取り上げ、考察を試みたい。

### 1. 『古事記』における敬語表現

以下は古事記における葦原中国の「言向け」の段を取り上げてみたい。タケミカヅチは高天原から葦原中国を平定するために派遣され、葦原中国の主であるオホクニヌシに対して、その国を譲ってもらえるかと問う。そこで、オホクニヌシの息子のタケミナカタがやってきて、タケミカヅチに対して力比べをしたいと申し出る。タケミカヅチが自らの手をタケミナカタに握らせて、その手を氷柱、さらに剣の刃に変える。そうすると、タケミナカタが撤退する。以下は古事記の漢字文および読み下し文を確認する。

如此白之間、其建御名方神、千引石擎 a. 手末 而來、言、誰來我國而、忍々如此物言。然、欲為力競。1) 故、我、先欲取其 b. 御手。2) 故、令取其 c. 御手者、即取成立氷、亦、取成劍刃、故爾、懼而退居。(如此白す間に、其の建御名方神、千引の石を手末に擎げて来て、言ひしく、「誰ぞ我が国に来て、忍ぶ忍ぶ如此物言ふ。然らば、力競べをせむと欲ふ。故、我、先づ其の御手を取らむと欲ふ」といひき。故、其の御手を取らしむれば、即ち立氷に取り成し、亦、劍の刃に取り成しき。故爾くして、懼りて退き居りき。)(山口佳紀・神野志隆光 校注・訳『新編 日本古典文学全集 1・古事記』、小学館、2017年(初版1997年))

b.c. の用例は「御手」と記され、高天原の使者である天つ神のタケミカヅチの手に対して、敬語表現が用いられている。a. の用例は「手」に対して「手」とあるのみで、国つ神のタケミナカタの手を指す。

1) 「故、我、先欲取其 b. 御手」の主語は我（タケミナカタ）である。タケミナカタがタケミカヅチの手を先に取りたいと言い出す。2) 「故、令取其 c. 御手者、即取成立氷、亦、取成剣刃」。人称代名詞や人名の使用が見られず、主語が明確化されていない。だが、「御手」とあることから、天つ神のタケミカヅチが動作の主体であることがうかがえる。動詞は「令取」の使役形となっており、手を取らせる主体がタケミカヅチであることが理解される。

1) 「故、我、先欲取其 b. 御手」から 2) 「故、令取其 c. 御手者」では主体が変わっている。だが、主語は明示されず、「御手」という敬語表現が用いられることによって、手は誰のものが明示され、それによって手を握る、握らせる主体が暗示されている。この場面における敬語の使用は主体を明確化させる役割を担っている。<sup>1</sup>

では、この部分は英語およびロシア語にどのように翻訳されているのかみてみたい。

#### 翻訳例 1. 英語 (Philippi 1968)

As he was saying this, this same Take-mi-na-kata-no-kami came bearing a tremendous boulder on his finger-tips, and said: "Who is it who has come to our land and is talking so furtively? Come, let us test our strength; 1) I will first take your arm."

2) When he allowed him to take his arm, he changed it into a column of ice, then again changed it into a sword blade. At this he was afraid and drew back. (Donald L. Philippi, trans. *Kojiki*. University of Tokyo Press, 1968, p.133)

1) 「故、我先欲取其御手。」は 1) "I will first take your arm." と訳され、タケミナカタがタケミカヅチに対して「あなたの手を取ろう」という意味の "take your arm" が用いられ、タケミナカタのタケミカヅチに対して問いかけている文脈であり、動作の主体とその動作が向けられている相手が明確である。だが、その次は 2) "When he allowed him to take his arm, he changed it into a column of ice," となっており、手を取らせた主体は誰であり、その手を氷柱、さらに、剣の刃に変えた主体は誰なのかがはっきりしない。そのために、翻訳者が注を付している。

2) の英文に対して "Take-mi-na-kata grasped the arm of Take-mika-duti, who changed his arm magically into an icicle and sword-blade." というように注の中で主体が明示されている。さらに、"At this he was afraid and drew back." の文に対しても、主体は Take-mi-na-kata であることは注によって説明されている。それに対して、日本語の文では人称代名詞が用いられず、主語が省略されている。さらに、その主体を示すために敬語が用いられている

<sup>1</sup> 鉄野昌弘「『神語』をめぐる」『万葉集研究』第 26 集、2004 年。

のである。

翻訳例 2. 英語 (Heldt 2014)

As he was saying this, the spirit Brave Southward Smelter came by, carting by his fingertips a boulder that it would take a thousand men to pull, and spoke saying: “Who is it who comes to our land and speaks so secretly and slyly? I challenge you to a contest of strength! I will grab your mighty arm first.”

1) He then offered Brave Southward Smelter his mighty arm, but straight-away it changed into an icicle and then into a sword blade. This Brave Southward Smelter, growing fearful, withdrew and sat down. (Gustav Heldt, trans. *The Kojiki: An Account of Ancient Matters*. Columbia University Press, 2014, p.46)

Heldt の訳は Philippi とは異なり、1)“He then offered Brave Southward Smelter his mighty arm” というように、手を差し出された主体はタケミナカタ (Brave Southward Smelter) であるということを明記している。さらに、撤退したのもタケミナカタ (Brave Southward Smelter) であることも明記している。さらに、Philippi と異なる点は「御手」を “mighty arm” と訳しているところである。天つ神と国つ神の関係性がみえてくるが、英語翻訳では、力比べをしたいと挑発している相手に対して、その手をほめたたえている文脈が不自然であるように受け取れる。

翻訳例 3. ロシア語 (ピヌス、1973)

Пока [он] так говорил, тот бог Такэминаката-но kami явился, подняв на кончиках пальцев скалу, что только тысяча человек притащить бы могли, и сказал: “Кто это в нашу страну пришел, и так шепотком-тишком разговаривает? А ну-ка, померяемся силой! Вот, я первый возьму тебя за руку”.

Потому 1) [бог Такэмикадзути] дал [ему] взять себя за руку, и тут же [свою руку] превратил в ледяную сосульку, а еще в лезвие меча ее превратил. И вот, 2)[бог Такэминаката] испугался и отступил. (Е.М. Пинус, 『古事記上巻』、モスクワ、1973 年)

ロシア語では人称代名詞が用いられないのだが、文中に鉤括弧の中で、述べられている動作の主体が示されている。1)[бог Такэмикадзути (タケミカヅチの神)]、2)[бог Такэминаката (タケミナカタの神)] の通りである。敬語がみられない。

以上の分析から日本語の原典では人称代名詞、あるいは人名を用いての主語は示されないが、敬語表現を通して主体が暗示されることがうかがえる。それに対して、当該文の英語訳・ロシア語訳では主語が必ず明示されている。Philippi 訳のように人称代名詞で示される場合や文中に人名など挿入し記述する方法も確認できる。どちらの場合においても、元の日本語の文章は直訳されず、文中あるいは注において、動作の主体が明示

され説明が施される。

こうした問題は言語の構造が異なることに起因していると理解される。英語やロシア語に訳すに際して、動作の主体を明確化する必要がある。だが、敬語の使用によって主体を示すという日本語の文体の特徴は英語およびロシア語へは翻訳される対象となっておらず、人称代名詞などの使用によってこの示されている。このような翻訳の仕方は主語を明示することにより、文章の意味を伝達するのだが、敬語の使用の問題は文章の意味解決や言語コードという枠を超え、文化的な現象へと展開する用例もある。このことについて次の用例の分析から考えてみたい。

## 2. 『古事記』における自敬表現

タケミカヅチは高天原から葦原中国へ派遣され、葦原中国の主であるオホクニヌシにその国を譲ってもらえるかと問う。その言葉の中に、アマテラス（タカキの神）の発話が出現する。以下は『古事記』の原文を確認する。

是以、此二神、降到出雲国伊那佐之小浜而、拔十掬劍、逆刺立于浪穗、趺坐其劍前、問其大国主神言、1) 天照大御神、高木神之命以、問使之。2) 汝之宇志波祁流葦原中国者、a. 我御子之所知国、b. 言依賜。故、汝心奈何。（是を以て、此の二はしらの神、（中略）其の大国主の神を問ひて言ひしく、「天照大御神・高木の神の命以て、問ひに使はせり。汝がうしはける葦原中国は、我が御子の知らさむ国と言依し賜ひき。故、汝が心は、如何に」）（山口佳紀・神野志隆光 校注・訳『新編 日本古典文学全集 1・古事記』小学館、2017 年（初版 1997 年））

タケミカヅチの発話の中に「a. 我御子之所知国、b. 言依賜。」とあるが、「我御子」とはタケミカヅチの子供ではなく、アマテラスの子供を指している。アマテラスがタケミカヅチの発話の中に表出し、自らの子供に対して「御子」というように敬語を用いている。さらに、「b. 言依+賜」（ご委任なさる）というように「賜」の補助動詞が用いられ、アマテラスは自らの行為に対して自称敬語を用いていることがみえる。2) の文章全体の意味は「お前が領有する葦原中国は我が御子の支配する国であると（我々が）ご委任なされた」となる。

自称敬語は神による自伝を意味し、<sup>2</sup> ここにおいては自称敬語が用いられているのは高天原の主催神、アマテラスが自ら語りかけていることを意味する。「1) 天照大御神、高木神之命以問使之」から「2) 汝之宇志波祁流葦原中国者、a. 我御子之所知国、b. 言依賜。」では、タケミカヅチからアマテラスへと主語が転換している。主語転換、主語未分化な表現は神による憑依現象として捉えられる。<sup>3</sup> ここでは、アマテラスがタケミカヅチに乗

<sup>2</sup> 三浦佑之『古代叙事伝承の研究』勉誠社、1992 年。

<sup>3</sup> 藤井貞和『古日本文学発生論』思潮社、1978 年。

り移り、その口を借りて、オホクニヌシに直接問いかけていると理解できる。<sup>4</sup> こうした自称敬語の使用や主語が明確化されていない文章は、英語やロシア語にどういうふうに翻訳されているのか。

#### 翻訳例 1. 英語 (Philippi 1968)

(中略) then, sitting cross-legged atop the point of the sword, they inquired of the deity Opo-kuni-nushi-no-kami, saying: 1)“We have been dispatched by the command of Ama-terasu-opo-mi-kami and Taka-ki-no-kami to inquire: 2)‘the Central Land of the Reed Plains, over which you hold sway, is a land entrusted to the rule of my offspring; what is your intention with regard to this?’” (Donald L. Philippi, trans. *Kojiki*. University of Tokyo Press, 1968, p.129–130)

1)“We have been dispatched . . .” とはタケミカヅチの発話であり、2) からはアマテラスとタカキの神の発話になっている。主体はアマテラスであることは日本語と変わらないのだが、日本語原文では直接話法の形をとっていない。

#### 翻訳例 2. 英語 (Heldt 2014)

Unsheathing sword ten hand spans long, they stood them upside down on the crest of the waves, sat cross-legged on their points, and questioned the spirit Great Master, saying: 1)“We have been sent at the mighty command of the great and mighty spirit Heaven Shining and the spirit Lofty Tree to ask you this: 2) “The central realm of reed plains you now rule is a land entrusted to our heir. What will you do?””(Gustav Heldt, trans. *The Kojiki. An Account of Ancient Matters*. Columbia University Press, 2014, p.46)

1)“We have been sent . . .” とはタケミカヅチの発話であり、2) からはアマテラスとタカキの神の発話になっている。主体はアマテラスであることは日本語と変わらないのだが、日本語原文では直接話法の形をとっていない。Philippi と Heldt のどちらもの英訳では、発話の中の発話、タケミカヅチの言葉の中のアマテラスの言葉であることを示すために (:) コロンと括弧が用いられている。さらに Heldt の英訳では、“ask you this” というように this これの説明後が挿入されている。さらに、どちらの英訳でも自称敬語は翻訳されていない。

日本語文ではアマテラスが2) からの言葉の主体であるのみならず、アマテラスがタケミカヅチに乗り移り、そのどちらもの声が記述されるという憑依現象として捉えられるもので、アマテラスがタケミカヅチに憑依することが文体の中から読み取れる。英訳でアマテラスの発話は直接話法の形をとっており、直接話法は単に他者の言葉を伝達し

<sup>4</sup> アンダソヴァ・マラル「古事記と『シャーマニズム』—葦原中国と命名することについて—」『日本文学』64巻5号、2015年5月。

ていることを意味する。だが、日本語の原文から読み取れるような憑依現象を表すのに有効でない。この文ではタケミカツチが神の憑依する依代となり、伝達しており、アマテラスとタケミカツチの声が重なっている。こうした現象をあらわす文体が英語やロシア語に訳されることは、どのようにしたら可能になるのだろうかということを、今後の「古事記」の翻訳に対して1つの課題として提示できるかと思われる。

### 3. 『源氏物語』における敬語表現

髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、下り端、肩のほときよげに、すべていとねぢけたるところなく、をかしげなる人と a. 見えたり。むべこそ親の世になくは思ふらめと、をかしく b. 見たまふ。(「空蟬」、『日本古典文学全集 12・源氏物語一』、小学館、1971年、p.194)

三谷邦明は『源氏物語』は古代後期の書物であり、その時代の貴族社会では、階級意識が強く、目上の人に対して敬語を用いることは必要であったため、語り手は天皇の行為を表す言葉として敬語を用いなければならないとする。<sup>5</sup>「b. 見たまふ」とは源氏の行為を言表する語り手の言葉である。それに対して、「a. 見えたり」は、敬語が欠落している。それは一人称の表出であり、源氏自身の内心文である。このように敬語を用いる・用いないことによって、動作の主体、つまり、主人公の動作を客観的に述べる語り手が主体なのか、源氏自身が主体なのか決まる。

さらに、三谷邦明はこうした表現を自由直接言説と呼び、読者に文章を主観的に読ませる働きをすると述べる。「文を読むとき、敬語が不在なため、読者は、それに不意打ちに出会い、あたかもこの言説を、一人称的に読んでしまう」と三谷は解している。物語文学特有の文体・表現であるとする。<sup>6</sup>

英語訳・ロシア語訳『源氏物語』では、こうした言説がどのように訳されているのか。みていきたい。

#### 翻訳例 1. 英語 (Waley, 1960)

Her hair grew very thick, but was cut short so as to hang on a level with her shoulders. It was very fine and smooth. 1)How exciting it must be to have such a girl sor once daughter! Small wonder if Iyo no Kami was proud of her. 2)If she was a little less restles, he thought, she would be quite perfect. (Arthur Waley trans. *The Tale of Genji: a Novel in Six Parts*. New York: Modern Library. 1960, p.48.)

<sup>5</sup> 三谷邦明『源氏物語の言説』、翰林書房、2002年、三谷邦明『源氏物語の方法―「もののまぎれ」の極北』翰林書房、2007年。

<sup>6</sup> 三谷邦明、注5に同じ。

## 英訳の日本語訳

彼女の髪はとても細く生えており、だが、肩あたりまで流れるほど短く切ってあった。それはとても美しく、可愛らしかった。このような子を娘として育て持つことはなんとすばらしいことだろう！ Iyo no Kami が彼女のことを誇りに思わないはずがない。彼女は少しだけ落ち着きがあれば完ぺきだと彼は考えた。

1) “How exciting it must be to have such a girl sor once daughter! Small wonder if Iyo no Kami was proud of her.” では直接話法あるいは間接話法の形式が用いられず、文中にそのまま一人称的な感想が述べられている。感嘆符（！）は感動を表す記号であり、その場面での表現主体の感動を表し、発話者の一人称の表出を意味する。ここでは見ている者、つまり源氏の主観として理解される。2) “If she was a little less restles, he thought, she would be quite perfect.” は “he thought” というように、人称代名詞が用いられ、間接話法の形になっている。1) のところでは、原文に近いような形で、読者に主観的に読ませる試みが読み取れる。

## 翻訳例 2. 英語 (Seidensticker, 1978)

Though not particularly long, the hair was rich and thick, and very beautiful where it fell about the shoulders. 1) He could detect no marked flaws, and saw why her father, the governor of Iyo, so cherished her. (Edward G. Seidensticker trans. *The Tale of Genji*. Tokyo: C.E. Tuttle. 1978, p.50)

## 英訳の日本語訳

特に長くはないが、髪はとてもふさふさで、肩に流れ落ちているところが美しかった。彼は著しい欠点を見つけず、彼女の父親が彼女をそれだけ大事にすることが理解できた。

源氏の内心文は示されず、1) “He could detect . . . and saw why . . .” というように、語り手が源氏の考えていることを客観的に描いている。主観的に読ませる記述ではないことがうかがえる。

## 翻訳例 3. ロシア語 (デリユーシナ、1991–1993)

По плечам живописно рассыпаются не очень длинные, но чрезвычайно густые волосы. На первый взгляд наружность ее 1) кажется безупречной. «Право, не зря ее отец так ею гордится, - 2) думает Гэндзи, с любопытством разглядывая эту прелестную особу. - Боюсь только, что ей недостает скромности». (Сикибу Мурасаки «Повесть о Гэндзи» перевод Т.Л. Соколовой-Делюсиной, Москва, 1991–1993. 紫式部『源氏物語 ロシア語訳』、T.A. ソコロヴァ・デリユーシナ訳、モスクワ、1991–1993 年）

## ロシア語訳の日本語訳

肩のあたりには、きれいな感じで、長くはないが、大変ふさふさした髪の毛が流れている。一見すると彼女の容貌は申し分ないように 1) 見える。「なるほど、親が彼女を誇りに思っていることは納得がいく」、と源氏は不思議そうに（珍しそうに）この美女を眺めながら 2) 考えている。（中略）

ここで注目したいのは「a. 見えたり」と「b. 見たまふ」のロシア語訳である。「a. 見えたり」は 1) “кажется（見える）” という人間の感情をあらわす無人称動詞で翻訳されており、無人称動詞は意思に左右されない「自発」の意味を持っている。<sup>7</sup> 無人称動詞の動作主体〈誰に見えているか〉は与格で示されることが多いが、当該文のロシア語訳は “На первый взгляд наружность ее 1) кажется безупречной（一見すると彼女の容貌は申し分ないように見える）” となっており、与格〈誰に見えているのか〉が明示されていない。主体不明の無人称動詞が用いられている。「b. 見たまふ」のロシア語訳だが、2) думает（考えている）という三人称単数動詞<sup>8</sup>で訳されている。動作の主体は源氏である。「a. 見えたり」から「b. 見たまふ」への移行は、無人称動詞から主体が明確な三人称動詞への移行という形で表されているといえる。主観的な叙述から客観的な叙述への移行が示され、読者に対してその場を主観的に享受させる文となっているのである。<sup>9</sup>

『源氏物語』は『古事記』と同じように主語が明確化されない場合が多く、敬語の使用によって主体を暗示させることがみえる。さらに、敬語不使用の場合は「a. 見えたり」のように、登場人物の主観的な描写への転換がみられ、三人称の語りから一人称へと切り替わることによって、文章が読者へと一人称的に伝わり、読者をも物語空間に同化させる、という現象が生じるとされる。英訳、ロシア語訳は感嘆符や無人称動詞の使用によって主観的に文を読ませる記述が試みられているのだが、敬語の使用・不使用という形式がみられない。

『古事記』、『源氏物語』からみえてきているように、主語を明確化させない点、敬語を用いて主体を暗示させる点は日本語の特徴であるといえる。こうした特徴は文法上のみならず、憑依現象という文化的な問題へ展開し、あるいは読者の位置とテキストの理解の問題へと展開する。こうした文体とその文体が背後に有する文脈を英語あるいはロシア語へ訳すにおいてどのような手法が必要なのか、きわめて重要な課題である。

## II. 文学のジャンルと方法の問題—ロシア語圏を中心に

ロシア語圏においては、文学をそれぞれの時代の特徴を表すものとして捉え、発展段

<sup>7</sup> 宇多文雄『ロシア語文法便覧 新版』、東洋書店新社、2016年。

<sup>8</sup> 宇多、前掲書。

<sup>9</sup> アングソヴァ・マラル「異言語間における言説分析—『源氏物語』ロシア語訳の事例から」『物語研究』18号、2018年3月。

階的に捉える傾向が強い。古代はオーラル文学あるいはフォークロアとして捉えられ、中世は宗教が大きな影響を及ぼす時代、近現代はモダニズムの時代として捉えられる。ヨーロッパにおいて確立していたジャンルはそうした中でそれぞれの位置づけを有している。こうした思考法では、それぞれの時代の文学を研究するのに有効である方法論を他の時代を研究するのに用いることは困難であるとされ、トラディショナル文学（フォークロア、口承文芸）研究方法と近代文学のそれとは異なるものと認識される。<sup>10</sup>

## 1. 『古事記』研究、作品論

1980年代に神野志隆光によって作品論が提示され、それまでに「記紀神話」として捉えられていた『古事記』、『日本書紀』は異なるコスモロジーを持っている作品として位置付けられた。<sup>11</sup> 諸学会へ大きな影響を与えたのだが、神野志隆光は近代文学の方法<sup>12</sup>である作品論を、古代の書物を理解するのに応用した点で批判された。<sup>13</sup> その批判の背景に『古事記』の古代の人々が思考・呪的世界観が現れる書物として捉える認識があるだろう。

こうした認識はロシア語圏における『古事記』の捉え方と共通する。ロシアの研究者は『古事記』を古代の口承文芸の伝統が現れている書物として捉えており、<sup>14</sup> 近代文学において有効な方法はトラディショナル文学と認識される『古事記』を研究するのに不適切であるとする。

## 2. 三谷邦明〈ポリフォニー、多声性〉

三谷邦明はバフチンの多声性という議論を応用している。だが、バフチンはポリフォニー小説と呼び得るものはドストエフスキーの小説のみであるとする。<sup>15</sup> バフチンは〈声〉を価値観、アイデア、個人の内的世界観として捉える。さらに、多声性＝声として価値観の対立は近代以降の文学において生じるとしている。なぜなら、前近代は権威的な価値観が強いためである。例えば、叙事文学の場合は、王や君主、英雄をほめたたえるような叙述が主流である。文の中に異義を唱え合うような異なるいくつかの価値観が存在しない。多くの社会層の対立や個人としての内的精神世界が重要視されるようになる近代社会の文学においてこそ、初めていくつかの異なる価値観が戦う場としてポリフォ

<sup>10</sup> 第16回バフチン国際学会（2017年9月6日-10日、中国上海）のロシア語部門において「バフチンのポリフォニー小説の概要と日本古代文学」と題した発表を行った。そこで、『古事記』を研究する上での近代文学方法の使用の妥当性についてロシア語圏の研究者と議論になった。

<sup>11</sup> 神野志隆光『古事記の世界観』、吉川弘文館、1986年。

<sup>12</sup> 三好行雄『作品論の試み』至文堂、1967年。

<sup>13</sup> 古橋信孝「古代文学研究の〈方法〉—文学史へ」『日本文学』59巻5号、2010年5月。

<sup>14</sup> N.I. コンラッド『日本文学 事例および解説』、レニングラード、1927年、E.M. ピヌス『古事記上巻』、モスクワ、1973年、L.M. Ermakova・A.N. Mesheryakov『古事記中巻・下巻』、サンクトペテルブルク、1994年。

<sup>15</sup> ミハイル・バフチン（桑野隆訳）『ドストエフスキーの創作の問題』平凡社、2013年。

ニー小説が可能となるとする。

だが、三谷邦明はこうした問題を顧みず、バフチンの〈多声性〉の議論を応用しながら、語り手、登場人物と読者の〈同化〉の議論を行っている。<sup>16</sup>

方法論は一つの普遍性がある概念として時代、文化、学問領域を問わず用いられる例は多くある。だが、その方法論がどの時代、思想、文化的文脈において生じ、どのように研究状況に対する発信として有効であったのかを認識することは重要であろう。

こうした問題は日本の文学作品を海外へ紹介するにおいても同様である。日本の古典文学の作品がロシア語圏へ紹介されるに際して、すでにヨーロッパにおいて形成されている文学ジャンルに当てはめられて紹介され、あるいは、すでに形成されている概念で説明される。例えば、「随筆」を「露:Эссе、英:essay、エッセイ」、『源氏物語』は小説「露:роман、英:novel」、和歌や漢詩は「露:поэзия、英:poetry」である。<sup>17</sup> だが、日本の古典文学を海外で紹介し研究するに際して、日本・東アジア独自の文脈やそれぞれの作品が誕生した背景を重要視する必要があると考える。

### 3. 国際性・学際性

日本の学会は細分化されている。隣接している学問分野の視点で行われている研究とは議論を共有できなくなっている。それに対して、ロシア語圏では日本に対する研究は広い視野のもとで行われる。以下、研究書の例を挙げてみる。<sup>18</sup>

A.R. サドコワ 『日本の民族の神話：文学及び口承』、博士学位請求論文、モスクワ、2000 年

A.V. コルテイニン 『中国、韓国および日本の神とデーモン』、モスクワ、2013 年

日本の学会においても隣接分野の研究者とも議論を共有できるように問題意識を持つことが必要ではないだろうか。日本の学会は広く問題設定をすること、広く研究することが必要であると考ええる。

---

<sup>16</sup> 三谷邦明、注 5 に同じ

<sup>17</sup> コンラッド、注 14 に同じ

<sup>18</sup> ロシア国立図書館、データベース。 <https://search.rsl.ru/ru/#f=18.04.2018&s=fdatedesc>